

2013  
秀作

## 第46回「おかねの作文」コンクール



# 募金から学んだこと

鹿児島県・ラ・サール中学校 2年 西富 琉之助

この体験は、数ヶ月前の出来事です。その日、僕は、コンビニエンスストアで買い物をしていました。レジの順番待ちをしていると、僕はふと、レジにある募金箱が目に入りました。その募金箱は、どこのコンビニにもある普通の募金箱で、今まで何回も目にしてきたものです。しかし今日は、順番待ちが長かったせいか、自分の番が来るまで、その募金箱をずっと眺めていました。その時、僕は、「まあ、1円くらいなら、募金をしてみるか。」とっていました。そして「募金なんて今日だけだ。」ともっていました。

やっと自分の会計になった時、おつりのなかに、1円玉がありました。商品を受け取った時に、生まれて初めて、1円だけ募金をしてみました。すると、その瞬間に、店員さんが、「ありがとうございます。」と言ってくれました。

その後、コンビニから出た後も、妙に満足感を感じていました。そして、1円だけでも、「世界の人々の役に立った。」と思えて、募金をした自分を少し誇らしく感じました。

その日以来、僕は、コンビニに行くたびに、できる限り、1円玉を入れ続けました。また、スーパーでも募金をしてみました。

しかし、この募金は、僕は1円玉をむやみに入れているわけではありません。きちんと、自分なりの募金のルールを定めています。

まず、募金をする時は、その募金したお金が、何に、どのように使われているかなどを、詳しく見た上で、募金をすることです。

次に、募金をする金額は、1円だけにすることです。僕のお金は、親が働いてくれて、稼いだお金であり、一応、他人のお金です。もっと高額なお金を募金するのは、自分で稼いだお金からにしようと思っています。





最後は、無理をせずに募金をすることです。毎日、必ず募金をする必要は全くないと思っています。「よし、やろう。」と思った時にしています。

この3つが、僕流の募金のルールです。

このルールで募金をしていたある時、少し気になることがありました。それは、お金がいくら多く集まったとしても、そのお金を使って支援をしたり、救助したりする人の数は足りているのか、ということです。その時、ある一人の声を思い出しました。その声は、東日本大震災の復興にあたる方々のうちの一人の声です。それは、「お金はあっても、人が足りない。」という声でした。僕は、それを思い出し、自分が、「お金さえあれば、人は助かる。」としか思っていなかったことに気づき、反省しました。そして、僕は、将来、人を助ける仕事がしたい、と強く思いました。

さらに僕は募金と人からある提案が思い浮かびました。それは、「一人一円政策」と「救助員制度」です。

まず、「一人一円政策」とは、その名の通り日本人の一人一人が1円ずつ募金をすることです。しかし募金は、強制ではないのでいくら募金しても、募金しなくても結構です。また、この募金は、国民に詳しく、使い道を説明することが必要です。このようにすると、日本の人口が約1億3,000万人であることから計算すると、1回につき、数千万円は集まりそうです。

次に「救助員制度」です。これは、「裁判員制度」と仕組みは似ています。全国から、健全でやる気がある人を募集し、数ヶ月「救助員」として働いてもらう制度です。もちろんその間の給料なども払います。そして、この「救助員」にも詳しい説明をすることが必要です。

そして、この「一人一円政策」と「救助員制度」をつなげることが目標です。必要な時に救助員を募集します。そして、国民の方々からも、募金をしてもらいます。そのお金で、救助員達の、使用道具や行動費、給料などを払います。そして、救助員がきちんと、働いて、結果を残します。その結果を、きちんと発表して、国民の信頼を得て、次回の必要な時の、救助員やお金を集めやすくします。このようなサイクルが成立します。僕は実現できれば、これが日本が活気づく、きっかけになると考えています。そして、この活動がやがて、日本から世界に広がっていけば、すばらしいなと考えています。





ある大きなことをするためには、「お金」と「人」が大切であり、必要であることが分かりました。そして、「お金」と「人」の関係について、もっと調べてみたいです。

今日は、募金箱が見つかるかなあ。

